

アイヌ口承文芸で語られる河童について

大谷 洋一

はじめに

河童といえば、日本独自の妖怪であると考えられがちであるが、アイヌの口承文芸の中にもミントウチやフントウチなどというアイヌ語名称で登場する。物語の伝承者は総じて日本語訳で「河童」と述べられる存在である¹⁾。

本稿では、アイヌ口承文芸の中に登場する河童がどのような振る舞いをして、アイヌとの関係性を築いているのかという点について、出来るだけアイヌ語原文で伝承されてきた口承文芸を素材にして、アイヌが抱く河童のイメージと文芸ジャンルによる語られ方の違いなどを探りたい。更に日本における河童の民話との相違点についても考察し、日本における河童のイメージが単純にアイヌに伝播されたものなのか、アイヌが河童の物語を発展的に創造している可能性について、話型を比較しつつ読み取ることにする。

一 先行研究

アイヌの河童に関するほとんどの研究は、河童のアイヌ語名称の起源や分布などのほか、河童の容姿や全道各地に言い伝えられた人が溺死した原因についての噂や世間話を収集して報告しているもの（更科源蔵、一九七〇、一九七七、一九八一a、一九八一b、一九八三）が多く、またそれらを引用して「ミンツチ（河童）」を紹介している著作物が多い傾向が見られる（石川純一郎、一九七四／和田寛、二〇〇五）。その中で特に注意を要する正確性を欠いた論文は兼松真文（一九八三）のものである。兼松は河童のアイヌ語名称が十八種もあることを報告しているが、筆者がそれらを引用先の原典にあたって再検討したところ、そのうちの八つは河童とは別の存在の「化け物」を指す呼称であることがその文脈から判明した。例えば、兼松が上げた「wen-puta-kamu」⁽¹⁾「wen-kasa-koro」⁽²⁾「toi-kasa-kor」⁽³⁾「mun-

「kasa-kori」「kosump-kamui」「iwa-kosimp」は河童以外の水のカ
ムイ(神)の眷属の呼称である。その他の河童のアイヌ語名称
についても、「ミントウチ」の「トウ」の表記を「ツ」「ツウ」
「。ツ」「ト」「ド」などと引用先の原典に記されたものを、「トウ」
とは別の発音として区別して数えるという誤った解釈がされて
いる。また、「minuci」の語尾に「tono(殿、大将、頭領)」や
「Kamui(神)」などの尊称が付いた名称も別名称としてカウ
ントすることによって名称を増やそうとする恣意性を感じる。

河童のアイヌ語名称は北海道の広範囲で「ミントウチ」、千歳
市で「ミムトウチ」、帯広市や釧路市で「フントウチ」^③という地
域差による三種しか認められない。この判断は実際に音声資料
を聴くことで判明するが、「フントウチ」だけは音声資料が見つ
からない状況である。

その後、三浦佑之(二〇二二)が久保寺逸彦(一九七七)に
掲載された河童の登場する「神謡(カムイユカラ)」と「聖伝
(オイナ)」を分析し、

右の神謡では、最後の部分の「私の夢で見たことは偽りで
はないと私は思う」という酋長の推測でしか語られていない
ところからみて、ミントウチが、アイヌにとつてかなり不安定
な存在であったということを示している。しかも、この伝承
では、ミントウチの姿形については何も語られていない。十勝
川にやって来て、酋長の家に住み着き一人娘と結婚したとい
う場面では人の姿をしているはずだが、ミントウチとしての姿

は示されていない。おそらく、ミントウチはアイヌにとつて由
緒正しいカムイ(トノ)ではなかったのだ。(下線は筆者に
よる)

というように、アイヌとミントウチの不安定な関係性を述べ
ている^④。筆者はミントウチの物語を網羅的に読んでいたので、
三浦の論考に賛同しつつ、さらに考察を進めたいと思う。

神謡や聖伝以外のジャンルで、筆者が翻訳した「散文説話(ウ
ウエベケレ)」においては、ミントウチはアイヌを救つてカムイ
として祭られる結末になっている(大谷洋一、二〇一六)。アイ
ヌと河童の関係性については、アイヌ口承文芸のあらゆるジャ
ンルで語られる河童の行動とその目的などを観察することで、
その特徴を明らかにしたい。

二 河童が登場するアイヌ口承文芸資料

以下に、河童が語られるテキスト資料をほぼ年代順に記し、日
本語によるアイヌ口承文芸のジャンル呼称、表題(日本語のみを
「」と記)、著者、発行年、伝承者、伝承地の順に資料を一覧す
る。散文説話については、日本民話のアイヌ語直訳、実在の先祖
の言い伝え、神謡の散文語りなどは通常の散文説話(ウウエベケ
レ)と異なる要素(伝承形態、語りの目的等)を含むものとして
「散文説話b」と記す。資料が掲載された文献は参考文献に記し
ているので、著者名と発行年で照合してもらいたい。

資料一、散文説話b、「吉田巖遺稿資料（ア08Y3）」、吉田巖

発行年不明、伝承者不明、伝承地不明

資料二、散文説話b、「ウチャシカマ」、山本多助、一九五八年、

秋田福治、釧路市

資料三、散文説話b、「カッパ」、浅井亨、一九六七年、砂沢ク

ラ、旭川市

資料四、神謡、「染退人の酋長の自叙」、久保寺逸彦、一九七七

年、平賀エテノア、平取町

資料五、神謡、「染退人の自叙」、久保寺逸彦、一九七七年、平

目カレピア、平取町

資料六、聖伝、「アエオイナの神の自叙」、久保寺逸彦、一九七七

年、平目カレピア、平取町

資料七、散文説話、「私はおじいさんに育てられて（クマに狙

われた娘がカッパに助けられる話）」、田村すず子、

一九九七年、川上まつ子、平取町

資料八、神謡、「河童と美女」、萱野茂、一九九八年、平賀サダ、

日高町

資料九、散文説話、「トバットウミから逃れたウライウシナイの

少年」、中川裕、二〇〇二年、白沢ナベ、千歳市

資料十、神謡、「河童が去ったわけ」、国立大学法人千葉大学、

二〇一五年a、平賀サダ、日高町

資料十一、神謡、「静内川の河童」、国立大学法人千葉大学、

二〇一五年b、鍋澤ネプキ、平取町

資料十二、散文説話b、「河童神の恋」、安田千夏、二〇一五年、

上田トシ、平取町

資料十三、散文説話、「河童に助けられた男の物語」、大谷洋一、

二〇一六年、上田トシ、平取町

管見によつてあげられるのは、以上の十三編のテキストである。

ジャンルの内訳は、散文説話三編、散文説話b四編、神謡五編、聖伝一編である。伝承地は平取町と日高町の沙流川筋が多く、千歳市、旭川市、釧路市が各一編で、資料一の伝承地不明は、河童のアイヌ語名称が釧路市と同じ「huncti」であることから北海道東部の伝承と思われる。河童の物語の中でも神謡と聖伝のジャンルが採録されているのは沙流川筋だけである。分布の偏りの理由は不明であるが、この十三編のテキストの梗概を観察する。

三 神謡で語られる河童

神謡五編は次の二つの（あ）（い）の内容で語られる。

（あ）資料八、資料十【梗概】

① 十勝川河口の村長に神が夢見で、村長の娘を妻にするために河童が行くことを知らせる。

② 村長が河童に対して「邪悪な熊」を退治したら娘を嫁にやるという難題をかけるが、河童がそれを退治する。

③ 村長が河童に対して「大蛇」を退治したら娘を嫁にやるという難題をかけるが、河童がそれを退治する。

④ 村長は河童に対して「蜂のお化け」を退治したら娘を嫁にやるという難題をかけると、河童は戦意を失い憤怒しながら十勝川河口から去る。

⑤ 河童はあちこちの河口の神に逗留を頼むが拒否される。

⑥ 静内川の河口の神に逗留を断られて河童は上流に向かった。

⑦ 静内川の上流にいる悪い神が河童に同情して人間への復讐のために川を氾濫させる準備をした。

⑧ 他の神々が相談してポロシリの神に緊急事態を知らせると、ポロシリの神が河童を説得して川の氾濫を止めさせた。

⑨ 静内川では河童が魚を豊漁にさせるが、その税として人間を溺死させている。

(い) 資料四、資料五、資料十一【梗概】

① 十勝川河口に住む長者に神が夢見で、長者の娘に惚れた河童が人間に化けて獲物を獲って長者たちを養っているが、河童の心の半分は悪い者であることを知らされた。

② 長者が娘の婿になっていた河童に「出て行け」と一喝して追放した。

③ 怒った河童は、「十勝川の畑の作物や獲物となる食料の魂を持って行く」と宣言して十勝川河口を去った。

④ 河童はあちこちの神に逗留を頼むが拒否される。

⑤ 静内川の河口の神に逗留を断られて河童は上流に向かった。

⑥ 静内川の上流にいる悪い神と棲むようになった。

⑦ 静内川は食料が豊かになったが、河童が人間を溺死させている。

(あ)と(い)の神話は全て「河童の婿入り」タイプであるが、(あ)では娘の父親から三つの難題をかけられ退散し、(い)の方は娘の父親から言われるがままに十勝川河口から追放される。その追い出され方が異なる。共通しているのは、婿入りしようとした河童は娘の父親の守護神(憑神)から夢見で青年の正体が河童であることを暴露されることと憤怒した河童が十勝川河口から静内川上流に移り棲むと川は獲物(食料)で豊かになるが人間を溺死させるという内容である。

神話での河童は、川を食料で豊かにする神性と人間を溺死させるという魔物の二面性が語られる。河童はアイヌから恐れられ「カミアシ(化け物)」や「ウエンカムイ(魔神)」と呼ばれ、アイヌからカムイとして祭られることはない。河童自身も人間にカムイとして祭るように一切要求しない点が神話での河童の特徴である。

四 散文説話で語られる河童

次の資料一は、日本の河童の民話「水神(沼神)の文使い」をアイヌ語に直訳した形式で語られたものであり、散文説話の

下位区分として仮に「散文説話b」としたものである。

資料一【梗概】

- ① 昔、貧乏な郵便配達の小さな和人が暮らしていた。ある日、郵便配達のために歩くと、橋の上に一匹の河童がいた。
 - ② 河童から「次の橋の上に俺のような者がいるから、この手紙を渡して返事を聞いて来い」と言われて一通の手紙を渡された。
 - ③ 和人は手紙の内容が気になって読むと「この手紙を持った人が行ったら、殺して食おう」と書かれていたので、和人は「この配達人が行ったら、お前の一番良い物を与えよ」と書き替えた。
 - ④ 手紙を持って行くと橋の上に河童がいたので手紙を渡すと、それを読んだ河童が「少し待っている」と言って川に入った。
 - ⑤ 河童が一つの金槌を持って来て「お前の欲しい物を言ったら地面を叩けばお前の欲しい物が出てくる」と言って金槌をくれたので、配達人はお礼を言って家に帰った。
 - ⑥ 和人は欲しい物を言いながら金槌で叩くと何でも出てきたので金持ちになって、町の殿様の娘を妻にして幸せになった。
- この物語は和人伝承の河童の民話がほとんど話型を変えずにアイヌに伝播されている。広い意味で「和人の散文説話」というジャンルに属すが、そのジャンルの特徴である長編化^⑤もなく、アイヌ文化の要素も全く加味されていない。この河童の目的は

和人を食うことであるが、その和人が機転をきかして河童を騙して宝物を奪う一種のトンチ話になっている。

資料三【梗概】

- ① 私は遠くの村で毎晩一人ずつ人が殺されるという噂を聞いた。
- ② ある日、その村を訪ねると空き屋ばかりであったが、煙の出ている家があったのでそこに入り、家主の老人と挨拶を交わした。
- ③ 夕方になると老人は「今夜は私の家族が殺されるだろう」と話すので、私は家の者を寝させて見張りをした。
- ④ 私は薄く平たい石を拾って来て、尻に当てる紐でしばってから囲炉裏の側で座っていた。
- ⑤ 何者かが家に入ってきて、私の尻当ての石を触るので、その手を掴んで見ると、頭が禿げた小さい男^⑥(河童)であった。
- ⑥ 河童が逃げようとして暴れると、私が掴んだ片手が抜けたまま河童が逃走した。
- ⑦ 私が眠って夢を見ると河童が現れて「私は河童の首領であるが、人間のほらわたほど美味しい物はないので毎晩村人を殺していたのです。もう悪いことはしないで腕を返してください」と言うので、私は河童の腕を埋めた。
- ⑧ 老夫婦は私に泣いて感謝して宝物を持たせてくれ、その村は平和になった。

この物語では、前半の①～④までは通常のアイヌの散文説話

と同様に話が展開している。③では細かいアイヌの作法が語られているのを筆者が梗概の中で省略しているが、実は、訪問客が他人の家の近くで物音を立てると家の中の女性が外に出て、客の様子を見てから家に戻り、家主に客の様子を話してから、客を家へ上げてでもいいのかを伺う作法の様子が語られている。そこまではアイヌ的であるが、⑤以降は日本民話の要素が色濃く語られている。例えば、河童から身を守るために平たい石を尻に縛り付ける場面である。この場面を日本民話では瓦を尻に付け結ぶ。他には、「河童の腕抜け」や「河童の謝罪」などがある点で、アイヌの散文説話と日本民話が融合された物語の内容と考えられるので、これも散文説話bと区分しておく。

前に紹介した神話五編と資料一などと同じ様に資料三も、河童がアイヌに対して自分をカムイとして祭るように要望する場面が全くないことに注目しておきたい。

資料六【梗概】

- ① 私は入り江を見回りに浜へ行こうとしたら、後ろから「ズシンズシン」と音がする。
- ② 振り返ると青大将の神が尾で音を出し、舌を出し出ししながらするのが言葉として聞こえた。
- ③ 青大将は「汝ほどの神でも見えぬか？こちらに大勢の船が汝の村に向かっている。早く迎え討つ準備をしろ」と言うのであった。

④ 見ると確かに大船団が向かって来るので、私は魂を与えた草人形くさひなぎたを作り、大船団に向かわせた。

⑤ しばらく戦いの物音が響き、生き残ったのは疱瘡神の弟神と飢饉の神の弟神であった。草人形も一人か二人だけが助かった。

⑥ 私の作った草人形は死んで生まれ変わり河童の神として海で生きていけるようにした。

⑦ 元は人形だから、河童の腕を引っぱると抜けるのはその起源によるものだ。

この物語は「聖伝」に区分される伝承であり、神話と同様にサケヘという折節のことを繰り返し返し、メロディーに乗せて語っているが、物語中の自叙者は動物などのカムイではなく、アイヌの始祖とされる文化神アイヌラックルが自叙する。アイヌラックルは疱瘡神や飢饉の神が襲来するのを見て、草人形の神を作って撃退した。その死んだ草人形を河童に生まれ返したという河童の起源を語っている。資料三で河童の腕が抜けるようになった理由が、この資料六で明らかにされている。河童はアイヌラックルが魂を込めて新たに作られたカムイであると述べられているが、アイヌからカムイとして祭られる存在にはなっていない。先行研究で三浦が指摘した河童の存在の不安定さがよく表れている。

資料七【梗概】

- ① 私はお爺さんに育てられて何不自由のない生活をしていた

が、お爺さんの足腰が弱くなってからは私が山菜や小魚を捕って暮らしていた。

- ② ある日、お爺さんが「私が死んだら、お前は一人ぼっちになるから、人捜しに行きなさい」と言って、この村の人々が夜襲で殺され、私とお爺さんだけが生き残った理由を説明した。

- ③ 山向ここの村へ行く途中にある仮小屋で一晩泊まり、近くの沢で水の神に安全祈願することを私は教わった。

- ④ 私は旅に出て、お爺さんに教わった目印をたよりにして仮小屋に着いた。

- ⑤ 近くの沢に行つて供物を撒きながら、水の神や沢の神、山の中にいる神々に自分の無事を祈った。

- ⑥ 食事を済ませて寝ようとしたところ、頭の半分まではげた男の子が弓矢を持つて小屋に入り、私の向かい側に座った。

- ⑦ 男の子が「私は河童の王だ。今までお前のお爺さんが水の神に供物を捧げていたのでそれを分けて貰っていた。山裾の悪い熊がお前を殺しに来るのが見えたので助けに来たのだ」と言つた。

- ⑧ 河童は燃えている薪に灰をかけて部屋を真っ暗にしたところ、熊が小屋の戸口に引っこかりながら「娘が気に入ったから魂を取つて神の国へ連れて行くつもりだ」と言いうと河童は熊に矢を射ると熊が逆戻りして静かになった。

- ⑨ 河童が「化け物を懲らしめてやった。私の武器で殺された

ものは生き返れない。山向ここの村へ行つて事情を話せ。私は河童の王だ。上等の御幣は遠慮するけど、乾いた酒粕と皮のままの硬い御幣を私に捧げてくれ。そうすれば私は

一人前の神らしくなれるのだ」と言つて姿を消した。

⑩ 夜が明けて水汲みしてから河童の神と水の神にお礼を言いながら供物を撒いた。

⑪ 食事して山向ここの村へ行き、村の中央の家に招かれて、家主の老人に今までの経緯を説明した。

⑫ その家の姉妹や兄弟が帰宅すると、老人は息子たちに私のお爺さんのことや私が河童の王に助けられたことを説明した。

⑬ 老人が私に「お爺さんの家に帰つたら、村人の一部をそちらへ移住させてもよいかどうか尋ねなさい」と言つた。

⑭ 村の若者たちが私と仮小屋へ行くと、熊の死体を殴りながら「夢見をさせなかつたら地獄へ落とすからな」と罵声をあびせた後で、若者たちは水の神や河童の神に祈つた。

⑮ 私や若者達の夢に熊が人の姿で現れて「自分を化け物にしないで神として祭つてくれたらお前たちを幸せにする」と述べた。

⑯ 若者たちは熊が神の仲間入りができるように祈つた。

⑰ 私たちが家に着くと村長の息子が今までの経緯や村へ移住したいことなどを話すと、お爺さんは泣いて喜んだ。

⑱ 山向ここの村から大勢の人たちが移住して来て、私は若者と結婚して子供をたくさん産んだ。

①⑨ お爺さんは皆から大事にされて大往生した。私の村は大きな村になり、夫が村長になり幸せに暮らした。

河童が登場するのは⑥～⑨のみであるが、主人公の村が消滅しそうになった理由、河童が悪党の熊から助けてくれた理由、悪党の熊が神として祭られる理由、河童が神として祭られて村が栄えた理由など、随所に事の成り行きを説明する場面があり、物語が長編化する要因になっている。

注目するのは河童が⑦の項目で、詳しくは「私は人に知られていない神であるから、だれから私がいることを聞いて、私に供物まきをしてくれたというわけではないのだけれど、『水の神様と一緒にいる神々はみんなで食べるために供物まきをしているのですよ』と言いながら、お前のおじいさんは供物まきをする。そうすると、私にもたくさんの食料が与えられるのだ。それで私は神の仲間としての面目をほどこすことができていたのだが」と述べた点である。河童は人に名を知られていないが、水の神の眷属として供物を分け与えられていたことになり、項目⑨で悪党熊から娘を助けた契機として、河童自らが初めて自分の名を伝えてカムイとして祭られるようになったのである。このことは三浦（二〇一二）が述べたように、アイヌが河童の存在を知らなかったために「河童がカムイとして不安定な存在」であることを物語っている。このことは、河童の存在がアイヌに伝播した歴史が浅く、古からアイヌが河童をカムイとして扱っていないかったことの証左と言えるかもしれない。口演時間

は五〇分五十七秒の長編で、河童の登場する日本民話を大きく上回る本格的な散文説話である。

資料九【梗概】

- ① 私はウライウシナイで両親と暮らしていた。ある日、赤ちゃんの弟をおぶって川上へ魚捕りに行った。
- ② 暗くなったので家の近くの舟着き場まで来ると、夜盗（トバットウミ）の群が来たことに気づいて川上へ逃げた。
- ③ 夜盗の群は私たちが川に流されたと思い違いして引き返した。私は山に逃げて小屋を作り、魚や狼の食べ残した熊や鹿の肉を持ち帰って暮らした。
- ⑤ 私と弟は村探しに出かけると大きな村を見つけた。村の中央の家の前に弟といると、家主のお爺さんが家に招き入れた。
- ⑥ 私が今までの経緯を話すとお爺さんとお婆さんが魔払いとねぎらいの儀式をしてくれた。帰宅したお爺さんの息子たちも私の苦難の体験を知り、ねぎらつてくれた。
- ⑦ 私たちはその息子たちと兄弟のようにして成長すると、村人が夜盗のいるモシリパウンサラ村と戦うために出かけた。
- ⑧ モシリパウンサラの村長の祭壇の傍らに大きな木が立っていて、その上に河童が住んでおり、その河童が戦の守護神として夜盗の群について行くので、いつも夜盗が成功するらしい。

⑨ 村人たちは何日もかけて戦いに勝つための祈祷をしながらモシリパウンサラに着くと、その村長と談判を始めた。

⑩ 談判をしている間に、他の者たちが河童の住む大きな木を燃やし倒して、落ちた河童を殴り殺した。

⑪ 村長がモシリパウンサラの村長に談判に勝ち、「やつは嘘の談判で宝物を奪っていた。自分の物があるか確かめろ」と叫んだ。

⑫ 山のようにあつた宝物を取り返し、「今度、嘘の談判をしたら生かしてはおかないからな」と言つて、その村から帰つた。

⑬ 私は結婚してウライウシナイに戻り、子供をたくさん産み、弟も結婚して子供がたくさんできて村が再興した。

⑭ 私は「川上の村の人たちと仲よく行き来して暮らせ」と言い残して亡くなった。

この散文説話での河童が悪者と結びつく点は、神謡における河童が「悪い神（水の神の眷属）」と共に暮らすことと共通する。しかし、本編は唯一、河童はアイヌから殴り殺されており、他の物語に較べて河童の超人性が低い。それは項目⑨にあるように、村人が何日もかけて神々に戦いに勝つための祈祷をしていたからだと思われる。項目⑧で河童は、悪人の「戦の守護神」としてモシリパウンサラの村長と悪行を働いた。つまり、河童は悪人からカムイとして祭られていたことになり、人物の善悪の区別をせずに人の守護神となる。口演時間は不明であるが二七ページ分の長編である。

資料一二【梗概】

① 私は妻と一人娘と何不自由なく暮らしていたところへ、青年が泊まりに来た。

② 青年は鹿や熊を獲ったり、薪を集めたりする働き者であった。ある日、青年は自ら自分の正体は河童であることを明かし、「あなたたちを守る神から人間の娘と結婚したら地獄へ落とすと脅されたので静内へ行く」と述べて去つた。

④ 娘は青年のことを好ましく思っていたので青年の後を追つたが、もう河童の姿は消えていた。

⑤ その後、河童が静内で人間の村を荒らしているという噂を聞き、自分たちは無事でよかつたと安堵した。

本編は（一）の神謡（い）タイプの散文語りである。散文説話として語られて変移した部分は、項目④にあるように娘が青年の正体を河童と知つても好意を持つて後を追う点である。神謡と同じく河童の行動の目的は「婿入り」することであるが失敗する。口演時間は七分三十二秒であり、日本民話よりも長めである。

資料一三【梗概】

① 十勝の上流で私は両親と何不自由なく暮らしていた。

② 父から「十勝の下流の村に若い娘がいるから嫁に貰つて来い」と言われて私は旅に出た。

③ 父から教えられた場所に倒木があり、その下で寝る準備をしてから、水の神に木幣を立てて無事を祈った。

④ 河童の神が現れたので互いに礼拝して、一つのお椀と一緒に食事をすると河童は自分を恐れなかったことに感謝した。

⑤ 河童が「お前が向かっている村は明日の夜に夜襲に襲われるが、自分が全てやつつけるからお前の手柄にして、そのことは誰にも言うな」と言った。

⑥ 翌日、その村へ行くと村人は宴会の準備をしていた。私が来訪したことを村人が歓迎してくれた。

⑦ 私は村人を一つの家に集めて、どの家も灯りを消させた。宴会が始まった途端に村人は全て眠ってしまった。

⑧ その家の中に河童が入って来たので、私は礼拝してから河童に酒を飲ませた。

⑨ 夜盗の群が、どの家も留守なことを不審がつてひそひそと喋りながら忍び寄って来るのがわかった。

⑩ 河童が外に出て一人で夜盗の群を全滅させると、私に再会する約束をして去って行った。

⑪ 翌朝、村人が目覚めて外に出ると大勢の夜盗が死んでいた。私、私が退治したのだと思って宝物をくれようとした。

⑫ 私は宝物の贈与を断り「村長の娘を嫁に欲しい」と言う、村長が喜んで二、三日祝宴を開いた。

⑬ 娘を連れて村へ帰る途中の倒木の下で野宿すると娘はすぐに眠ってしまった。

⑭ 河童が現れて、「今回のことはお前の父にだけ話して、私に對して硬い木幣と硬い酒粕で祭ってくれ。お前の守護神になつてやるからな」と述べて去って行った。

⑮ 娘を連れて村に帰り、父に河童の神に助けられたことを言う、父は喜んで河童を神として祭った。

⑯ 私は下流の村人と交流し、子供たちに「河童を祭ってくれ」と言い残して亡くなった。

本編は河童が人助けしてカムイとして祭られるまでの由来が語られる。それが河童の行動目的であるが、「硬い（粗末な）木幣と酒粕」で祭るようにと遠慮がちに依頼する。通常の散文説話では、そのような要求を他の神々は主人公やその父親の夢見の中で述べるのであるが、資料三以外では夢見に現れない。河童は家主の父親に對して、その息子を通じて伝言したり、しかもそれを遠慮がちに述べたりする点（資料七、資料十三）が、他のカムイと異質である。口演時間は一九分五七秒と日本民話に較べて長い。

資料二【梗概】

① 美幌のトクスアイヌという人と釧路のラミタクアイヌという人が阿寒湖畔の村で出会った。

② トクスアイヌの憑神は河童、ラミタクアイヌの憑神はシマフクロウ、二人は七日間もウコチャランケ⁽⁹⁾（談判）し合った。

③ あるアイヌが二人の憑神の名を他のアイヌに伝えたため、

憑神の怒りに触れて死んだという。

- ④ 明治一八年五月、和人の役人たちが相談してラミタクアイヌを責任者に任命し、釧路の村から四十戸のアイヌを鶴居村へ移住させた。ラミタクアイヌは阿寒郡全体を仕切る指導者となった。

- ⑤ ラミタクアイヌは和名を浦見琢藏（うらみ・たくぞう）と言いい、トワマツという女の子とイノシケという男の子がいた。トワマツの息子が山本多助である。

本編は北海道東部で実際にあったとされる先祖の伝説であり、具体的な地名や人物の名前と実際にあった釧路アイヌの移住の話が語られている。アイヌの世界観ではシマフクロウは高い神格を持っているが、北海道東部では河童がそれに引けを取らない程に能力が高く評価されている。

五 日本の河童伝承との比較

日本民話に登場する河童の主なモチーフを（一）～（八）のとおりに抜き出して、一三編のアイヌ伝承の河童と共通性があるのかを見る。ここでは、神謡の散文語りである「資料一二」を元々のジャンルである神謡に含めて考えたい。

- （一）河童の胸引き（アイヌになし）
（二）河童の妙薬（アイヌになし）

- （三）河童の腕抜け（散文説話bに一編、聖伝に一編あり）

- （四）河童の婿入り（全ての神謡にあり）

- （五）河童の文使い（散文説話bに一編あり）

- （六）河童の相撲誘い（アイヌになし）

- （七）河童が人を溺死（全ての神謡にあり）

- （八）河童の畑荒らし（アイヌになし）

アイヌ口承文芸では、全ての神謡に（四）と（七）のモチーフが含まれる。一方、散文説話では通常の伝承形態とは異なる「アイヌ語直訳（資料一）」が（五）に、「神謡の散文語り（資料三）」と「聖伝（資料六）」が（三）のモチーフに含まれているのみであり、本格的な散文説話では、日本民話の河童の主要なモチーフは排除されているのがわかる。

日本民話の河童は、人間に相撲を誘ったり、いたずら好きで愛嬌のある一面が語られるが、アイヌではそのような河童は皆無である。むしろ、アイヌ口承文芸では河童が夜盗の群を全滅させたり、人を溺死させたり、逆に人間から殴り殺されたりするなどと、血なまぐさいイメージで語られる。日本民話では女の河童が語られるが、アイヌ口承文芸に女の河童は登場しない。また、日本民話では河童の容姿がよく語られて多くの絵画を残しているが、アイヌ口承文芸では散文説話で「頭が半分はげた男の子（資料七）」と「頭が禿げた小さい男（資料三）」及び神謡で「小男（資料十）」と表現される程度で、河童の容姿を詳しく語らない。⁽¹⁰⁾

日本の河童の民話は、数十秒から四分程度で語り終えるが、アイヌ口承文芸では登場人物の行動理由やその体験談が話中で何度も説明される場面が特に散文説話に顕著であり、約十一分から五十一分に及ぶ長編化が見られた。

六 まとめ

紙幅が尽きたので結論を簡潔に述べる。河童は神話において、「婿入り」の目的に失敗して村を追放され、静内川上流の悪神と意気投合して人を溺死させる行いから「魔物」としての立場をとるが、散文説話^bを除く本格的な散文説話においては、特定の人間を援助することでアイヌから「カムイ」として祭られる立場を得る、というようにジャンルの違いで河童の行動目的が全く異なることがわかった。

和人から伝えられた河童が、北海道のアイヌ社会を舞台として語られることにより、アイヌ口承文芸との融合¹²を経て、アイヌの行動規範（カムイノミ¹¹御神酒やご馳走で神を祭る）や世界観を反映させたストーリーとして展開される。そして、アイヌ自らがアイヌの文化的要素（様々な作法などの描写）をふんだんに盛り込ませた長編の物語として、特に散文説話の内容は多様性があり、河童との互恵関係などを築く過程が詳細に語られていることから、河童はアイヌ口承文芸の中で、アイヌが発展的に新たな物語を創造してきたといえる。¹³

附記

本稿は、二〇一六年六月五日に北海道大学において開催された、日本口承文芸学会第四〇回大会における発表内容を骨子に論文をまとめるにあたって、発表後に頂戴した意見と文献資料を参考に加筆・修正をした。ご指導くださった諸先生方に深くお礼申し上げます。

注

- (1) 不思議なのは、アイヌ口承文芸では「河童」や「化け猫」は語られるが、「天狗」や「鬼」や「古狸」などの怪異な存在は伝承されていないことである。なぜ河童がアイヌに受け入れられたのかという問題は今後の課題としたい。
- (2) 久保寺（一九七一、二六ページ）は凡例で「日本語にない(E)の音は「ツ」であらわした」と述べ、「トゥ」の発音表記として用いている。
- (3) 「フントゥチ」をアイヌ語呼称として筆者が認める理由は、「ミントゥチ」の「トゥ」を現す表記の「ド」が用いられた「フンドチ」という呼称が記録されているからである。
- (4) 筆者が第四〇回日本口承文芸学会で研究発表した約一週間後、立正大学大学院文学研究科長の三浦佑之先生からこの著書の提供を受け、本稿の加筆・修正を行うことが出来た。
- (5) 本格的な「和人の散文説話」では、アイヌの散文説話の長

編化の特徴が反映される（大谷洋一、二〇一一年）が、単なる和人の民話のアイヌ語直訳ではその現象は現れない。

- (6) 数少ない河童の容姿を語った場面であるが「禿げた小男」しかわからない。アイヌ語で「小男」の表現は「成人した男性」を意味する「rupne aynu」と語られる。

- (7) 少ない河童の容姿を語った場面であるが「禿げた男の子」しかわからない。

- (8) モシリバウンサラの村長の「戦の守護神」である河童が殺されたために談判で勝ったということであろう。

- (9) 二人の男性が互いに雄弁を競い、負けた相手から賠償の品や女性を奪う行為のことである。

- (10) アイヌ口承文芸からは、ほとんど河童の容姿をイメージすることは出来ないうが、資料十三は「nen ka ek wa ekari a=nukar kusu mintuci kamuy ahun hine（誰かが来て、正面を見ると河童の神様が入って）」というようにアイヌが一見しただけで河童と知るのであるから、河童は異形のものであると考えられる。

- (11) 丸田雅子・田中浩子・小池ゆみ子・小林美佐子（編）（二〇一六）に添付されたCDにより、「河童淵」の口演時間を測ると三分五十六秒であった。

- (12) 筆者が「散文説話b」と区分した日本民話のアイヌ語直訳の物語や日本民話とアイヌの行動規範等が混合した物語などを指す。

- (13) アイヌに伝わる河童の物語の全ての梗概に紙幅がかさみ、尻窄みで書き終えた感があり読者に対して心苦しいが、アイヌ口承文芸に登場する河童の全話を紹介し終えたことは資料紹介として有意義ではないかと思う。

参考文献

- アイヌ民族博物館（編）二〇一五『アイヌ民族博物館民話ライブラリ2 上田トシの民話2』一般財団法人アイヌ民族博物館
浅井亨（編）一九七二『日本の昔話2 アイヌの民話』日本放送出版協会
石川純一郎 一九七四『河童の世界』時事通信社
稲田浩二・小澤俊夫（編）一九八九『日本昔話通観 第1巻 北海道（アイヌ民族）』同朋舎出版
大谷洋一 二〇一〇『和人の散文説話―継母から殺された姉を救った妹―』『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第17号』北海道立アイヌ民族文化研究センター
大谷洋一 二〇一六『アイヌ口承文芸「散文説話」―河童に助けられた男の物語―』『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第1号』北海道博物館
兼松真文 一九八三『ミンツチ（mintuci）源流考―アイヌ民族の河童―』『月刊言語』9月号、大修館書房
萱野茂 一九八一『キツネのチャランケ』小峰書店
萱野茂 一九九八『萱野茂のアイヌ神話集成 第1巻 カムイ

ユカラ編Ⅰ』ビクターエンタテインメント

金田一京助 一九一四『北海道の河童』『郷土研究』郷土研究社

久保寺逸彦 一九三二『河童^{ミンツナ}の譚』『民俗學』第五卷十二号、民俗學會

俗學會

久保寺逸彦 一九七一『昔話研究資料叢書 別卷 アイヌの昔話』三弥井書店

久保寺逸彦 一九七七『アイヌ叙事詩 神話・聖伝の研究』岩波書店

国立大学法人千葉大学 二〇一五a『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次（北海道沙流郡平取町）調査報告1／3』国立大学法人千葉大学

国立大学法人千葉大学 二〇一五b『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業第2年次（北海道沙流郡平取町）調査報告2／3』国立大学法人千葉大学

小松和彦、常光徹、山田奨治、飯倉義之（編）二〇一三『日本怪異妖怪事典』東京堂出版

更科源蔵 一九七〇『アイヌ民話集（増補改訂版）』北書房

更科源蔵、安藤美紀夫 一九七七『北海道の伝説』角川書店

更科源蔵 一九八一a『アイヌ伝説集 更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅰ』みやま書房

更科源蔵 一九八一b『アイヌ伝説集 更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅱ』みやま書房

更科源蔵 一九八三『アイヌ伝説集 更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅲ』みやま書房

集Ⅳ』みやま書房

砂沢クラ（筆録）・平田角平（訳）一九七一『アイヌの叙事詩』野火文学会

野火文学会

武田静澄 一九五六『河童・天狗・妖怪』河出書房

田村すず子 一九九七『アイヌ語音声資料10』早稲田大学語学教育研究所

教育研究所

中川裕 二〇〇二『アイヌ口承文芸テキスト集3 白沢ナベ口述トパットウミから逃れたウライウシナイの少年』ユーラシア言語文化論集 第5号 千葉大学ユーラシア言語文化論講座

早川昇 一九七〇『アイヌの民俗』岩崎美術社

三浦佑之 二〇一二『古代研究 列島の神話・文化・言語』青土社

丸田雅子・田中浩子・小池ゆみ子・小林美佐子（編）二〇一六『遠野の昔話 菊池力松さんのむすめたちの語り』企画室・コア

山本多助 一九五八『ウチャシカマ』『アイヌ・モシリ 第三号』アジア・アフリカ言語研究室 ※本稿では浦田遊（編）一九九八『アイヌ・モシリ』幻のアイヌ語誌復刊』釧路アイヌ文化懇話会を参照。

（おたに・よういち／北海道博物館）